

## 絵本の読み聞かせにおける絵と言葉の関連性 —『こすずめのぼうけん』を手がかりに—

内田 由香利

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2022年10月21日受付、2022年12月5日受理)

### 要 旨

絵本は、絵と文章で構成されている。そして、読み聞かせの時は、耳で文章を聞いて、目で絵本の絵を見るという行為が同時に行われる。絵を見る時、文章のみを聞く時、絵を見ながら文章を同時に聞く読み聞かせ時では、子どもの物語の世界での楽しみ方はどう異なるのだろうか。そこで、絵本を子どもの視点で見直し、「読み聞かせ」において、その物語が子どもの心にどのように届いていくのかを絵と言葉の関連性に着目して考察した。絵本はやはり読み聞かせ時に、その効果が最大限に発揮された。その際、聞き手の年齢や経験に応じた絵本の選択が大前提であり、聞き手に合わせた絵の見せ方やその時間、文章の読み方、ページをめくるタイミング等、読み聞かせの技能が重要であった。

### はじめに 本研究の目的

絵本は子どもが読む本、子ども自身が手に取って読む本というイメージがある。しかし、松居直氏は、『絵本の力』<sup>1)</sup>の中で、「絵本は大人が子どもに読むもの」「絵本は、大人が子どもに読んでやる本」と断言している。つまり、「大人が子どもに読み聞かせすることが望ましい本」ということであろう。併せて大学生の例も提示し、大人である大学生でも「絵本を自分で読む時と読んでもらう時とでは非常に違う印象をもつようである」と言う。筆者も、大学の授業で絵本の読み聞かせを行うことがあるが、確かに「自分で読む時より読んでもらった時の方が印象深く心に残る」という感想が多い。また、松居氏は続けて、「絵を見ながら読んでもらう時に不思議な働き、大きな世界を作っていく。」という。読み聞かせ時は、耳で言葉を聞いて、目で絵本の絵を見るという行為が同時に行われる。その同時性により、感じ取ることが出来るものが大きいということであろう。「子どもは挿絵を見るのではなく、読んでいるのです。絵というのは、全て言葉の世界です。子ども達は絵を読むのです。絵の中にある言葉を読む。そしてまったく同時に耳から言葉の世界を体験する。耳から聞いた言葉の世界と目で見えた言葉の世界が子どもの中で一つになります。そこに絵本ができる。」と。確かに、絵本を自分で読む場合、文字を読む必要があるため、どうしても絵を同時に見ることはできない。言葉と絵の間に溝ができる。しかし読んでもらえれば「絵を見る(読む)」「文章を聞く」ことが即座にできる。絵から想像できる世界をイメージしながら、同時にその絵に関わるお話を聞くことができるのである。松居氏は、「絵本の中に印刷されている挿絵は静止画ですが、子どもの中に見える絵本の絵は、生き生きと動いている。耳から聞く言葉が絵をどンドン動かし、広がっていきます。そういうふうにして子どもは絵本体験をする。自分で物語の世界を作る体験をする。そういう体験が実は絵本の本質に触れることです。」とも言う。「言葉が挿絵を動かしていく」とは、絵だけでは想像しきれないことも、言葉で説明を加えることで、分からなかったことが明らかになり、その想像の世界がさらに広がり、動き出すということであろうか。

佐々木宏子氏<sup>2)</sup>は、絵本の絵の読み取りに着目し、「絵は、やはり広い意味での経験の積み重ねにより「読み取られていくのです。」という。そして、ある程度の生活経験がある子どもは、その経験を基に物語の世界を想像することができるが、経験が少ない子どもには、歌を歌ったり、ジェスチャーを入れたり、文章の語り口の工夫をしたり、表情を付け加えたり、といった様々な働きかけが必要なことにも言及している。さらに、絵は「色と線」にすぎないと断言している。しかし、大人の語りかけによる直接的な感情の表現が手助けになり、一枚の絵から、その意味を想像するし、その絵に惹きつけられるという。つまり、絵本の世界は、絵本とそれを読み聞かせる大人と、子どもの想像力によって成立するということであろう。では、子どもは絵本からどのようにして物語の世界を作っていくのだろうか。そして、絵を見るだけの時と、文章だけの時、

絵を見ながら文章を同時に聞く時では、子どもの物語の世界の広がりはどう異なるのだろうか。

絵本の読み聞かせの時に、子どもの視点で、その物語が子どもの心に届いていく過程を絵と言葉の関連性に着目しながら考察することで、子どもの心に届く読み聞かせの方法について、ヒントを見つけられるのではないかと考える。そこで、本稿では『こすずめのぼうけん』<sup>3)</sup>を手がかりに、①絵と言葉の関係を読み解く②読み聞かせ時の子どもの反応から「読み聞かせ」の方法について検討することを研究の目的とする。

## 1 『こすずめのぼうけん』の概要と構成

『こすずめのぼうけん』(図1)は、ルーズ・エインズワース・石井桃子訳、堀内誠一絵で、1977年に月間「こどものとも」の一冊として刊行され、「こどものとも傑作集」として福音館書店より市販本化されたロングセラー絵本である。筆者の手元にあるのは、1996年第35刷の絵本である。裏表紙には「読んであげるなら4才から、自分で読むなら小学校初級向き」とあり、「日本図書館協会選定」「全国学校図書館協議会選定」「中央児童福祉審議会推薦」と明記されている。高く評価されている絵本である。筆者がこの絵本を知ったのは、約25年前、当時幼稚園児だった娘がきっかけである。年中児だった娘は、この絵本を園からくり返し借りてきていた。返却しても、またこの絵本を借りてくる。そして、読み聞かせを繰り返す。単純なストーリーのどこにそこまで子どもを惹き付ける要素があるのか不思議に感じていたことを記憶している。中村柊子氏<sup>4)</sup>は、「時を重ねて静かに温められ、いつしかなくてはならぬ一冊となる絵本」として、この「こすずめのぼうけん」を挙げている。回を重ねるごとに、新しい発見をしていく絵本であり、言葉の意味や言い回しに興味を持ったり、ある時はじっと絵を見つめ、登場人物の身になって物語を受けとめたりしながら、友達と関わっている様子も紹介している。「言葉の意味をさぐるようとしている子どもには、絵が大いに助けとなる」として、「すのふち」「おけいこ」「いごちちがよさそう」「だらしない」等のことばとの出会いについて、行間のニュアンスや絵をヒントに、子どもたち同士でものにしていくと述べている。

そこで、本稿ではこの絵本を手がかりに、絵と文章の関係について、考察していきたい。あらすじは、以下のとおりである。

こすずめがお母さんすずめから飛び方を教えてもらって、初めて空を飛んだ日のこと。こすずめは、上手に飛べたことがうれしくて、つい遠くまで飛んでいってしまう。しばらくして、羽が痛くなってきたこすずめは、休む場所を探してあちこちの巣を訪ね回るが、どこに行っても仲間ではないという理由で中に入れてもらえない。辺りは暗くなってくる。もう飛べないと思った時、向こうから自分と同じ影が歩いてくる。お母さんすずめである。お母さんすずめは、言うことを聞かずに飛び出していったこすずめを叱ることなく、愛情豊かに包み込む。背中に乗せて巣に戻り、温かい羽根の下で休ませるのである。

この物語は、訳者の石井桃子さんが講演の中で、イギリスの作家による幼児のための優れたお話の例として紹介されたものらしい。挿絵は『たろうのおでかけ』や『ぐるんぱのようちえん』など、ポップな作品のイメージのある堀内誠一氏による。刊行当時「こどものとも」編集長だった時田史郎氏<sup>5)</sup>は、この堀内氏の絵について、「『こどものとも』50周年記念ブログ」の中でこのように記している。

「この物語の素晴らしさのひとつにリアリティーということがあげられますが、だからといってあまりにも写実的な絵では、物語のおもしろさが生き生きと伝わってきません。どこまで現実の「すずめ」なり、物語の舞台となっている「田園」をデフォルメするのが好ましいのか、堀内さんはそのバランスにずいぶん苦心なさっていました。

(中略)

しかし、完成した『こすずめのぼうけん』を手にとって見ると、この物語には、この絵しか考えられないという思いがします。堀内さんが最初からこの表現方法を思いつかれ、一気に描きあげられたようにし



【図1】『こすずめのぼうけん』の表紙

か思えません」

この絵と話がマッチして、子ども達に愛されるロングセラーとして親しまれているのだろう。この本をくり返し借りてきた娘も「絵本は、いつも絵で選んでいた。」と話していた。リアリティーがありながら、水彩の温かさも併せもった堀内氏の絵には、子どもを惹き付ける何かがあったのだろうと推察する。

本文は、中表紙を含めて31ページ。中表紙には、題名とこすずめの巣があると思われる大きな木と、これから冒険するのであろう風景が淡い水彩画で描かれている。物語は、横長の見開き一面で描かれており、パノラマ的に風景を見渡すことができる。本文だけで15面になっている。この15面は、大きく分けると以下の三場面から成っている。

第一場面（2-9ページ、見開きでは4面）きづたのつるの中にできた巣の中に、こすずめの親子が住んでいる。こすずめに羽が生え動かすことができるようになると、母すずめは飛び方を教える。こすずめは、教わった通りに羽を動かし、巣から飛び立っていく。

第二場面（10-23ページ、見開きでは7面）疲れたこすずめは、休むところを見つめるため、様々な鳥の巣に寄ってみる。しかし、仲間ではないと断られ続ける。

第三場面（24-31ページ、見開きでは4面）辺りが暗くなりはじめ、もう飛ぶことができなくなったこすずめの前に、お母さんすずめが現れる。そして、背中に乗せて巣に戻り、こすずめは温かいお母さんすずめの羽の下でゆっくり眠る。

以下、この三場面ごとに、読み聞かせを聞いている子どもの立場に立ち考察したい。

読み聞かせとは、聞き手である幼児にとって、絵を見るときという行為が先にあり、その営みが十分に行われて、読み手の声が聞こえてくる。目の前の絵にはこんな文章が書かれているのだと分かって、改めて絵を見直し、さらにその内容が分かってくる。そして、更にその続きが見たくなるという過程が望ましいと考える。そこで、読み聞かせの過程を上記のように想定し、目から入る情報としての絵と耳から入る文章から、子ども達はどのようなことを理解し想像しながら、物語を読み進めるのかに着目しながら考察していきたい。

## 2 第一場面における絵と文章から汲み取れること

### 2-1 巣の中にいるお母さんすずめとこすずめの様子（2-3ページ）

子どもと同じ目線に立ち、まず絵を見ていく。ツタのからまる大木の中に、小さなすずめの巣が描かれている。木の中に作られた巣は、たくさんの葉っぱに囲まれ、周りから見えにくくなっている。色合いも木や葉っぱと馴染んでおり、目立ちにくい。中には羽を広げたこすずめと、巣のふちに止まってそれを見守る少し大きなすずめが描かれている。大きなすずめのまなざしは、こすずめに注がれている。こすずめは巣の外を大きな目でみていることから、外の世界への好奇心を持っていることも想像できる。次に、文章と重ね合わせると、その様子の具体が理解できる。（以下【 】は、絵本の文章である。）

（ア）【あるところに、いちわの こすずめが いました。その こすずめは、おかあさんすずめと いっしょに きづたの つるのなかに できた すのなかに すんでいました。】…一羽のこすずめのそばにいるのは、お母さんすずめであることが分かる。一对一の親密な親子関係がうかがえ、子ども達は自分のお母さんを思い浮かべるかもしれない。

（イ）【さて、この こすずめに、やわらかい ちゃいろの 羽が はえ、つばさを ぱたぱた させることができるようになると、あるひ、おかあさんすずめが、とびかたを おしえはじめました。】…こすずめは、まだ羽が生えたばかりであること、やっと羽を動かすことができるようになり、飛び方の練習を始めたばかりであることが分かる。

### 2-2 飛び方の練習をする親子の様子（4-5ページ）

見開きの左ページ端に巣と親子の様子が描かれている。見開き両ページにわたって長く続く石垣、あまり高くはないが、その向こうには、赤い実のなる大きめの木が一本見える。そのほかの木は、上の方が少し見えるくらいなので、結構高い石垣であると感じられる。その石垣を超えようとする意欲が、こすずめの様子からうかがえる。全ページの絵と違って、巣の一番前に立ち、斜め上を見上げながら、大きく羽を後ろにやり、飛び立とうとしている。「よし、今からあの石垣の向こうまで行くぞ。」と言わんばかりの様子である。



子ども達は、絵からもその意欲を感じる事だろう。

(ア)【「すのふちに たちなさい」と、おかあさんはいいました。「それから、あたまを うしろに そらせ、はねを ばたばたと やって、さっと とびだすんです。そして、いしがきのうえまで いったら、きょうのおけいこは、それで おしまい】…お母さんすずめがこすずめに飛び方を、具体的に、おけいこので厳しくきちんと教えようとしていることが言葉遣いからも分かる。また、計画的に少しずつ練習させようと、今日のけいこは石垣の上まで飛ぶことで終了することを伝えている。子ども達は、絵を見ながら、そう遠くはない石垣まで行けばよいと知って、少しホッとすることもかもしれない。

(イ)【そこで、ちいさな すずめは、すのふちに たちました。そして、むねを そらせ、はねを ばたばたと やって、さっと まえへ とびたちました。】…こすずめは、言われた通りにしっかりと胸をそらせ、羽を動かすと、さっと飛び立てたことが分かる。絵でも胸をそらせた姿がしっかりと描かれていることから、絵と文章の双方からこすずめのやる気が読者である子ども達にもしっかりと伝わる場面であろう。子どもは、自分が新しいことに挑戦した時の気持ちを想像し、飛び立ったこすずめに心の中でエールをおくるかもしれない。

### 2-3 巣から飛び立ったこすずめの様子 (6-7ページ)

こすずめは落ちずに飛んでいる。まず、飛び立つのに成功したことが絵から分かる。また、飛び立ったことで絵のアングルが変化し、石垣を見下ろす視点で描かれている。こすずめは、見開き中央に描かれている。目を大きく見開き、さらに上を目指し飛び出しており、飛ぶことに希望を膨らませている様子が見える。石垣の向こうには、緑の草原が広がり、更に向こうには、生け垣や大きな木が見渡せる。空の雲もつながっている。この先どこまでも飛んでいくことができるであろうことを想像させる風景である。

(ア)【すると、おどろいたことに、こすずめは、じめんに おちずに ちゃんと くうちゅうに うかんでいました。】…こすずめが、練習の初めからちゃんと飛べたことが意外なことであることが、「おどろいたことに」という言葉で提示される。この言葉を聞くと、子ども達も難しいことに成功したこすずめが勇ましく感じられるだろう。さらに子ども達は、落ちずに飛ぶことが難しいことを理解し、それができたこすずめに拍手を送りたくなるだろう。また、自分をこすずめに同化し一緒に飛び立った感じになり、この先にどんなぼうけんが待っているのかを想像しながら、わくわくするのではないだろうか。

(イ)【「ぼく、これなら、あのいしがきの てっぺんより、もっと とおくへ とんでいける」と、こすずめは おもいました。「はたけを こえて、そのさきの いけがきを こえて、そのさきの かわを こえて いける。ぼく、ひとりで、せかいじゅうを みてこられる」そういつて、こすずめは、はねを いよいよ はやく、ばたばた うごかしました。】…「ぼく」という言葉で、こすずめが男の子であったことが分かる。そして、石垣のてっぺんを超えるだけでなく、「もっと遠くへ」という文章から、さらにその先へと視線が注がれるだろう。緑の草原は畑であったことや、向こうに見えるのは川であったことも文章から理解できる。生まれてから今までは、巣の中でお母さんすずめから餌を運んでもらう生活だっただろうと推測され、それがこすずめ自身の言葉の文章から、自分ひとりで行動できること、世界中に飛んでいくことができるという気持ちにまでさせていることが分かる。その気持ちが羽を「いよいよ早くばたばたと」動かすことにつながったと想像できる。子どもも、こすずめの気持ちになり、この先、どのような風景が見られるのかへの楽しみが膨らむだろう。

### 2-4 飛び続けて疲れてきたこすずめの様子 (8-9ページ)

挿絵は、遠くまで見渡すことができるような高さで飛んでいるこすずめの様子を描いている。しかし、中央に描かれたこすずめは、これまでの表情とは違って、くちばしを開き驚いたような表情に変わり、羽も後ろに反っている。足の爪も曲がり、慌てている様子である。どこまでも飛んでいこうという様子ではなく、空中で止まっているようにも見える。石垣や畑を超え最初に遠くに見えていた川の辺りまで来たのだろうか。初めての飛行にしては、かなり長い距離を飛んできたことと推測される。絵を見て、何が起こったのかな、と感じる子どももいるだろう。文章と照らし合わせてみる。

(ア)【はじめのうち、こすずめは、とぶのは、とてもおもしろいことだと おもいました。ところが、そのうち、すこしずつ はねが いたくなってきました。それから、あたまも いたくなってきました。これ

では、どこかで とまって、やすまなくてはなりません。】…文章から、こすずめの変化が読み取れる。初めて空に飛び立ちとても面白いと感じた事、しかしどんどん遠くへ飛んでいった結果、疲れてきて羽が痛くなったこと、そのうえ頭も痛くなってきたということである。このまま飛び続けるのが困難になり、休む必要が出てきたことも示され、絵の様子とも相まって、読者は大丈夫だろうかと心配になるだろう。

### 3 第二場面における絵と文章から汲み取れること

#### 3-1 カラスの巣にたどり着いたこすずめとカラスのやりとり (10-11ページ)

こすずめは、細い木の枝にとまり、巣にいる鳥を見ている。その鳥は、こすずめの10倍以上はある大きさの黒いカラスである。木に作られたすり鉢状の巣の中で、こすずめに気付いたのか、声をかけられたのか、振り返っているカラスは、リアルに描かれている。こすずめよりとても大きいカラスなので、こすずめは怖いのか少し距離を置いている。

(ア)【その時、にれのきの てっぺんに、とりの すが、ひとつ あるのが みえました。それは、こえだで できた おおきな だらしない すでした。】…文章から、こすずめが止まったのは、楡の木であったこと、そして、小枝が乱雑に飛び出た巣であるからか、だらしない巣という表現が使われている。そして、その表現からカラスの印象が悪くなる。

(イ)【「あの、すみませんが、なかへ はいって、やすませていただいて いいでしょうか？」こすずめは、ききました。】…こすずめの言葉使いは、とても丁寧である。「休ませていただいて」という言葉を使うことができることから、こすずめがきちんとしつけられて、大切にされていることが感じとれる。子どもも、言葉使いのよさから「よい子だなあ。」と感じるだろう。そして、休ませてもらえるか、からすからの返事を一緒に待つだろう。

(ウ)【その すのなかには、おおきな くろい からすが、すわっていました。「おまえ、かあ、かあ、かあ、いえるかね？」と、おおきな くろい からすは、いいました。「いいえ、ぼく、ちゅん、ちゅん、ちゅんってきり いえないんです」と、こすずめはいいました。「じゃ、なかへ 入れることは できないなあ。おまえ、おれの なかまじゃないからなあ。】…からすは、こすずめのことを「おまえ」と呼ぶ。見下した呼び方である。そして、「かあ、かあ」という鳴き声で鳴くことができるかを尋ねる。すると、「ちゅん、ちゅん」としか言えないと答える。それを聞いて、仲間ではないから巣には入れることはできないと言われる。子どもは、文章を聞くことで、このやり取りの内容を理解する。そして、巣で休むことができないこすずめをかわいそうに思うだろう。そして、こすずめが心配になり、この先どうなるのか子どもの気持ちは次のページに向かうであろう。

#### 3-2 次の巣を見つけて飛ぶこすずめ (12-13ページ)

見開きの右側に木が描かれ、その木の中に隠れるように小さな巣が見える。こすずめは、そちらの方を指して飛んでいる。最初のように後ろの方へ大きく羽をそらせたり、上へ向かって飛んだりはしていない。見えている巣に向かって水平に飛んでいる感じである。

(ア)【そこで、こすずめが また すこし さきまで とんでいきますと、ひいらぎの ずっと たかいところに、もう ひとつ とりの すが ありました。こすずめは、その すのふちに とまって、】…その巣は、少し先で見つけたものであることから、それほど遠く飛んだのではないことが分かる。「ひいらぎ」という木の名前と、その木のずっと高いところに巣があることが文で示される。休むところを見つけるために飛んで、次の候補を見つけたことで子どももホッとするだろう。しかし、文章は、「すのふちにとまって」で終わっている。その続きを知りたいと、子どもはページをめくりたがるだろう。誰の巣なのか、こすずめは休めるのか、と興味津々になるのではないだろうか。

#### 3-3 やまばとの巣にたどり着いたこすずめとやまばとのやりとり (14-15ページ)

描かれた絵から、次は鳩の巣であったことが分かる。葉っぱの周りがギザギザで実のなった木が、前ページで示された「ひいらぎ」であることも、絵を見て理解するだろう。からすの巣よりももう少し丁寧に作られた巣が目に入る。からすの時と比べると、こすずめとの距離も近い。こすずめは、大きく目を見開いて鳩を見ている。鳩も真正面からこすずめを見つめている。子どもは、どうなるのだろうと、文章(説明)を聞

きたがるだろう。

(ア)【「あの、すみませんが、なかへ はいって、やすませていただいて いいでしょうか？」その すのなかに すわっていたのは、やわらかい はいいろをした やまぼとでした。】…また、こすずめは、巣の中で休ませてもらえるか丁寧な言い方で尋ねる。そして、そこは山鳩の巣であったことが分かる。絵から受ける印象と同じやわらかい灰色という文章から、前のからすとは違って、優しいイメージをもつだろう。そして、休ませてもらえるかもしれないと感じる子どももいるのではないだろうか。

(イ)【「おまえさん、くう、くう、くうって いえますか？」とやわらかい はいいろの やまぼとは ききました。「いいえ、ぼく、ちゅん、ちゅん、ちゅんってきり いえないんです」「じゃ、なかへ 入れることは できませんねえ。おまえさん、わたしの なかまじゃないからねえ】…こすずめを「おまえさん」と呼び、「くう、くう」と鳴くことができるかを尋ねる山鳩。こすずめは、からすの時と同様に「ちゅん、ちゅん」としか言えないことを伝える。そして、同じように断られる。「わたし」という言葉から、たぶんおばさん山鳩であることも想像できる。同じ表現の繰り返しを聞き、子どもは鳴き声が重要であることや、仲間であるかどうかで、休ませてもらえるかが決まることに気付くだろう。そして、疲れているのにまた休ませてもらえず、かわいそうに感じる子どもも増えてくるだろう。

### 3-4 休む場所を見つけようと飛ぶこすずめ (16-17ページ)

このページでは、まず空が夕焼け空として描かれ、時間の経過を感じる。こすずめは、また飛んでいる。右ページには、大きな木とその中ほどに穴が描かれ、そこに向かって飛ぶこすずめの姿は小さい。しかし、しっかりと穴をめがけて飛んでいることが分かる。

(ア)【そこで、こすずめは、また すこし さきまで とんでいきました。すると、かしのきのみきに、あなが あいているのがみえました。きっと、この あななら、もぐりこんで、いたい はねを やすめることができるでしょう。】…そこで、と始まり、2回入れてもらえなかったことが強調され、また少し先まで飛んで行ったことが示される。「すると」と巣があったことが強調される。そして、木は樗の木であったことが分かる。今回の巣は穴であり、「もぐりこんで」という表現もこれまでの2回とは異なることで、「今度はこすずめが休めるかもしれない。」と、子ども達の期待も膨らむだろう。

(イ)【こすずめは、あなのなかに くびを つっこんで、「あの、すみませんが、なかへ はいって、やすませていただいて いいでしょうか？」とききました。】…これまでは、巣のふちに止まって、尋ねていたこすずめも、さすがに疲れたのか、巣の穴に首を突っ込んで尋ねたことが文章から分かる。しかし、中へ入って休ませてもらってもよいかという丁寧な言い方は変わらない。くり返し出てくる尋ね方の表現なので、子ども達も覚えるかもしれない。これまでは、挿絵で誰の巣か分かったところで、中へ入って休んでもよいか尋ねていたが、この場面では、まだ誰の巣か分からないままこすずめが尋ねている。子ども達は、誰の巣なのか知りたいと、ページをめくることを求めるだろう。

### 3-5 ふくろうの巣にたどり着いたこすずめとふくろうのやりとり (18-19ページ)

ページをめくると、木に開けられた大きな穴が中央に大きく描かれ、中には片目を閉じたふくろうが座っている。何色も重ねて塗られた茶色の色彩が目飛び込み、木の幹の様子が鮮やかに描かれている。また、木には大きな葉が茂り、実もなっている。こすずめは、その穴のふちに止まり、大きなふくろうを見上げて何か言っている。くちばしが開いているところから、また仲間か尋ね休むことができるか確認しているのだろうと、想像できる。

(ア)【ところが、その すには、とんがった くちばしをした、ちゃいろの ふくろうが すんでいたのです。】…「ところが」という言葉で、また仲間ではなく、休むことを拒否されるだろうということが予想できる。そして、その鳥がとんがったくちばしのふくろうであったことがわかり、この一文で子どもも「またか」と気を落とすのではないだろうか。

(イ)【「おまえ、ほうほう、ほうほうって いえるかね？」と、ちゃいろの ふくろうは いいました。「いいえ、ぼく、ちゅん、ちゅん、ちゅんってきり いえないんです」「じゃ、なかへ 入れることは できないなあ。おまえ、わしの なかまじゃないからなあ】…ふくろうと分かったことで、ほうほう、という鳴き声もすんなり子どもの中に入り、応答の決まり文句にもなっている「いいえ、ぼく、ちゅん、ちゅん、ちゅん



んってきり いえないんです」も促せば、子どもも一緒に言えるようになっていないかと推測できる。そして、「わし」という言葉から、歳をとったふくろうであろうと予想できる。

### 3-6 休む場所を見つけようと飛ぶこすずめ (20-21ページ)

こすずめは、いよいよ疲れたのか、水際を飛んでいる。夕日が沈む様子が濃いオレンジ色の水平線と共に描かれ、時間の経過も感じさせる。水面にも夕日が写っている。こすずめが飛んでいく方向をよく見ると、水辺の草の中に鳥の影らしきものが見える。子ども達も、遅い時間になったことを感じ取り、疲れているこすずめのことを心配するだろう。

(ア)【そこで、こすずめは、また すこし さきまで とんでいきました。すると、いけの ほとりに、あしや くさで できた すが みえました。その すは、とても いごちが よさそうでした。こすずめは、そばまで ぴよんぴよん とんでいって、】…「そこで、こすずめは、」という表現は、前回と同様である。見えてきたのは、池のほとりのあしや草でできた巣なので、子ども達は、下の方を探すのではないだろうか。とても居心地がよさそうだとしたことなので、こすずめが休むことができると思うだろう。こすずめのとぶ表現が、「ぴよんぴよん」なので、地面について跳ねているようすを思い浮かべるだろう。もう飛べないのだろうかかと心配になるかもしれない。そして、このページの文章が、「そばまで ぴよんぴよん とんでいって、」と途中で終わって、次を想像させる書き方になっていることから、子どもはまたページをめくることを急ぐだろう。

### 3-7 かもこの巣にたどり着いたこすずめとかもこのやりとり (22-23ページ)

右ページ一面に大きなかもが描かれている。水辺の巣に坐ってこすずめと対面してる。こすずめは、あしの葉にちょこんと止まり、何か話しているようにくちばしが開いている。きっとまた巣で休むことができるか尋ねているのだろうと、子どもは容易に推測するだろう。同じ状況の繰り返しの4回目である。そして、それがまたすずめとは違う鳥であることから、絵を見ながら子ども達は、また断られることを予想するだろう。

(ア)【「あの、すみませんが、なかへ はいって、やすませていただいて いいでしょうか？」とききました。そのすにすわっていたのは、ひらたい きいろい くちばしをした かもでした。】…絵を見た子ども達は、こすずめの決まり文句を、今回も断られることを想像しながら聞くだろう。そして、それが平たい黄色いくちばしを絵で確認しながら、かもという種類の鳥であることを理解するだろう。

(イ)【「おまえさん、くわっ、くわっ、くわっていえる？」と、かもは いいました。「いえ、ぼく、ちゅん、ちゅん、ちゅんってきり いえないんです」「じゃ、なかへ 入れるわけには いかないわねえ。おまえさん、わたしの なかまじゃないもの】…かもの鳴き声が「くわっ、くわっ」であること、また巣には入れないことが文章からも確認できるが、絵を見た時点で、これまでの物語の流れから、今回も巣で休ませてはもらえないと予想するのではないだろうか。「おまえさん」という言葉からは、おぼさ的な言い方を感じ、「わたし」という言葉で、メスのかもであると理解するだろう。ここまで何度か繰り返される「仲間ではないので、巣に入れて休ませてはもらえない」という状況に、「また、だめか」と、子どもは慣れてくるかもしれない。

## 4 第三場面における絵と文章から汲み取れること

### 4-1 飛ぶことができなくなったこすずめの前に現れた影 (24-25ページ)

夕暮れの空が向こうに描かれ、草むらに降り立ったこすずめ。向こうを見ると、同じような姿形の影が見える。子ども達は、これまでの展開と違っていることに絵を見て気付くだろう。そして、優しい色合いで描かれたこのページを見て安心するのではないだろうか。

(ア)【あたりは くらくなりはじめ、ちいさい すずめは、もう とぶことが できませんでした。そこで、ぴよんぴよん、ぴよんぴよん、じめんのうえを あるいていきました。】…この文章から、もう飛ぶことができなくなったことが確認でき、これまでの出来事(巣を訪ね歩くこと)で、疲れ切ったこすずめであることが子ども達にも伝わるだろう。それでも、止まったままではなく、ぴよんぴよん歩いて進んでいることも文章から分かる。

(イ)【すると、むこうのほうからも、じめんを ぴよんぴよん、やってくる とりの すがたが みえました。】…ぴよんぴよん、というこすずめと同じ歩き方が文章でも示されたことで、それを聞いた子どもは、「やっとお母さんすずめに会える」とホッとしたり、その瞬間のことを想像しながら、わくわくしたりするのではないだろうか。

#### 4-2 母すずめとの再会 (26-27ページ)

お母さんすずめとこすずめがくちばしを突き合わせて、見つめ合っている様子が描かれている。よく見ると、こすずめの目には涙がにじんでいる。周りは前ページの色合いと同じで、しかし細かいものは描かれず、お母さんすずめとこすずめのみ姿が描かれている。子ども達は、この瞬間を待っていたのではないか。きっと、これまでのこすずめの様子を思い出しながら、お母さんと会えたという事実を絵から読み取って安心するだろう。

(ア)【「ぼく、あなたの なかまでしょうか？」と、くたびれたこすずめは いいました。「ぼく、ちゅん、ちゅん、ちゅんってきり いえないんですけど】…これまで、巣を見つけるたびに、中に入って休んでもよいかをくりかえし尋ねてきたこすずめであった。そして、「仲間ではないから巣には入れられない」と言われ続けたため、今回は仲間かどうかを尋ねる。くたびれていることを文章でもはっきり表している。「ちゅん、ちゅん、ちゅんってきり言えないんですけど」と、「けど」に戸惑いや不安な気持ちを感じられる。

(イ)【「もちろん、なかまですとも」と、その とりは いいました。「わたしは、おまえの おかあさんじゃないの。きょうは、いちにち、おまえを さがしていたんですよ。わたしの せなかに おのり。いえまでおぶって行ってあげるから】…「もちろん」という言葉がこすずめにとってどんなに心強かったか。そして、続けて「そのとり」がお母さんだったこと、一日中探していたことが文章で示される。子ども達もどれだけホッとするだろうか。何回もほかの鳥の巣を訪ねていたからこそ、お母さんすずめとの再会の喜びもひとしおに感じられるだろう。絵で表されたこすずめの涙にも深く共感する子どももいるだろう。お母さんすずめは、「背中にお乗り」というが、ここから後は、こすずめの会話文はない。言葉が示されないからこそ、その思いを自由に想像しながら、母との再会のシーンが子ども達の心に映像としても残るのではないだろうか。

#### 4-3 母すずめの背中に乗って巣に戻るこすずめ (28-29ページ)

夕焼け空が淡いオレンジ色と空色の水彩画で描かれている。母すずめは、大きく羽を広げ颯爽と飛んでいる。巣に帰っていることを示すように、これまでとは反対の向きに飛んでいる。こすずめは、母の背中に乗っている。こすずめは、母の顔を確認しているかのように大きな目で覗き込んでいる。すずめのこのような(おんぶして飛ぶ)姿を実際に見ることはないだろうが、子ども達にとって、おんぶされるという安心感や温かみを感じる姿を描き、共感できるようにしたのではないだろうか。

(ア)【そこで、こすずめが、おかあさんの せなかに おぶさると、おかあさんは、こすずめをつれて、きづたのなかの すまで、とんでかえりました。】…この文章では、きづたの中の巣へ飛んで帰っていることのみが示されている。文章が少ないからこそ、子ども達は絵から想像しそれぞれの思いをもちながら、こすずめと一緒に安堵感を覚えるだろう。

#### 4-4 母すずめの羽の下で眠るこすずめ (30-31ページ)

はじめのページで示されたきづたの中の巣が、大きく描かれている。その巣の中には、羽の下にこすずめを抱きながら、優しい視線を注いでいる母すずめと、安心して目を閉じ眠っているこすずめの姿が見える。こすずめは、母すずめの方を向いて眠っている。何か夢でも見ているのではないかと感じるような嬉しそうな寝顔である。

(ア)【それから、こすずめは、おかあさんの あたたかい つばさのしたで ねむりました。】…文章はこれだけである。温かい翼の下で眠ったという、絵から読み取れる事実を文章で表現している。そこには、お母さんすずめやこすずめの気持ちは書かれていない。文章は短い、ゆっくりと読み、すずめの親子の気持ちを感じ取らせたいものである。

このページをめくると、初めの中表紙に描かれていた風景が夜になっている。濃い青色で月夜が描かれ、色々あった一日が終わろうとしていることが示されている。



## 5 読み聞かせの実践から

2020年9月4日、保育園に通う5歳女児を対象として、女児の自宅において「こすずめのぼうけん」の読み聞かせを行った。この幼児は、普段から絵本の読み聞かせに親しみ（就寝前の父母の読み聞かせ、保育園での読み聞かせの経験多数）、感情表現も豊かである。この本は、「保育園にある」（見たことがある）が、読み聞かせをしてもらったことはないということだった。筆者は、上記で挙げた絵本の読み取りを基に、物語の世界を豊かに想像させることを目指し、1対1の読み聞かせを実施した（女児の母親もそばで一緒に読み聞かせの様子を見ていた）。読み聞かせの時には、幼児の表情が見えるような位置で動画を撮影し、その映像記録を基に検証を行った。

以下は、読み聞かせ時の女児の発言（C:）と反応である。

- ① 表紙や中表紙を見て C:木がいっぱいある。きれい。<木が印象的だったようだ。>
- ② 飛び方の練習をする親子の様子（4-5ページ）  
巣の中のこすずめの絵を見ながら、C:落ちないようにね。<巣のふちに立って、羽をはばたかせる様子の絵を見ながらつぶやいていた。>
- ③ 巣から飛び立ったこすずめの様子（6-7ページ）  
「せかいじゅうをみてこられる」というこすずめのセリフを読んだ後、C:せかいじゅうをみてこられる。楽しそう。<そう言って、笑顔で羽をパタパタと動かす真似をした。>「世界中を見に行く」という視点の広がり文章により加わったようである。
- ④ 飛び続けて疲れてきたこすずめの様子（8-9ページ）  
「あたまもいたくなってきました。」と読んだ後、C:頭も痛くなってきました。歩いて行かないけん。<きつそうに言った。> 疲れた様子は、絵だけでも理解できていたようだが、文章により、頭まで痛くなってきたことを自分の経験などからも想像し、よりこすずめの疲労感を感じたようである。
- ⑤ カラスの巣にたどり着いたこすずめとカラスのやりとり（10-11ページ）  
「だらしのないすでした。」と呼んだ後、C:だらしのない巣（巣の挿絵の方を見ている。黒いカラスを指さす。）「だらしのない」という言葉が印象的だったようである。絵にその態様は描かれているため、「だらしのない」という言葉で表現できることを理解したようだった。  
C:大きい。黒い。なんか怖い。<からすが印象的だったようだ。>
- ⑥ 休む場所を見つけようと飛ぶこすずめ（16-17ページ）  
C:あな。誰がいる？<穴ということで今までの巣とは違うと考えた様子だった。>
- ⑦ ふくろうの巣にたどり着いたこすずめとふくろうのやりとり（18-19ページ）  
C:わし？おじいさん？女の子かと思った。<挿絵では、ウインクした可愛い女の子のふくろうと思ったようで、「わし」という一人称に驚き、面白かったのか大笑いした。>絵から受けた印象と、実際に耳から入る文章による事実との相違を楽しんでいた。
- ⑧ 休む場所を見つけようと飛ぶこすずめ（20-21ページ）  
C:あひる？<挿絵を見ながら、草むらに鳥の姿を見つけ、つぶやく。あひると予想したようであった。しかし、描かれた絵では小さくよくわからない様子だった。>文章により、理解できたようであった。  
C:また仲間じゃない。だめやね。<仲間というキーワードを聞き取り、仲間ではないと巣に入れてもらえないことを理解した様子であった。やや飽きた様子、椅子を触る。>「仲間」というキーワードが耳から入ったことで、次頁から「仲間であるかどうか」ということを考えながら、読み進めることになったようである。
- ⑨ かもの巣にたどり着いたこすずめとかもとのやりとり（22-23ページ）  
C:かもやった。<前のページで予想した鳥とは違っていたが、文章を読む前に挿絵を見てすぐ「かも」と発言。>ここでも、文章により理解できたようであった。  
C:おまえさん？<そう言って、けらけら笑う。おまえさんの言い方が面白かったようである。>耳から入ってきた言葉で楽しんでいた。
- ⑩ 母すずめとの再会（26-27ページ）

＜一日おまえを探していたんですよ。という文章で、自分の母の方を見てほほ笑む。＞文章により、母親のこすずめへの思いを改めて実感することができたようであった。

⑪ 母すずめの背中に乗って巣に戻るこすずめ (28-29ページ)

＜黙って絵を眺めている。＞

⑫ 母すずめの羽の下で眠るこすずめ (30-31ページ)

C：眠ったんだ。よかったね。＜少し照れ臭そうに、絵を見ていた。よかったとほっとした表情も見られた。＞

読み聞かせにより、絵を見て理解が不十分な点が、言葉により明確に伝わっている部分があった(⑦⑧⑨)。また、絵により物語を豊かに想像していた(①③⑧)。さらに、同じ行動の繰り返しで、物語のパターンを理解し、展開を予想しながら、絵本の読み聞かせを聞いていた(⑧)。最後には絵をじっと見つめ、安心した様子だった(⑩⑪⑫)。読み終わった後、発話は少なかったが、自分の母親を見ながら安心した様子が見られた。

今回の読み聞かせでは、読み手に合わせた絵本の選択の重要性を再認識することになった。年長児である5歳児にとっては、もっと物語の展開があるものの方がよかったのではないか、ということである。母親と話すと、「年中の時だったら、この繰り返しのお話をもっと喜んだかもしれません。今回は話の展開の予想がつく絵本だったため、わくわくする楽しさがあったかという点で、今一つ反応が悪かったのではないのでしょうか。」ということだった。聞き手の発達段階や読書経験に合った絵本の選択がまず「読み聞かせ」の絶対条件である。絵本を絵と文章の割合から分類すると、①絵が中心で文章が少ないもの、②文章が中心で絵が少ないもの、がある。今回の絵本は、どちらかという①である。しかし、ページによっては文章の量が多く、読むことに追われるページもあった。また、ストーリー性においては、①物語の展開が読めないもの(意外性のあるもの)と、②パターン化してストーリーがほぼ読めるものに分類できるであろう。この「こすずめのぼうけん」は、②である。瀬田貞二氏も提言した「行きて帰りし物語」の構図通りに展開されるが、この女儿の場合、単純に感じているようにも感じ取れた。確かに、こすずめがぼうけんの末、母親に会えた安堵感は感じていたようだったが、日頃から母親の愛情を感じている女儿にとっては、当たり前前の結末であったのかもしれない。堀内氏の繊細で優しい色使いの丁寧な描かれた絵をもう少しじっくり見せながら、少しやり取りすれば、女儿はより物語の世界に入り込めたかもしれないと考える。絵と文章が同時に流れ込む「読み聞かせ」が子どもの想像力をかきたてることは間違いないが、その際の絵本の選択や、また同じ絵本でも、聞き手に合わせて、どう絵を見せるのか、どのタイミングでページをめくるのか、そこでどう話しかけるのか、読み手の力量が問われると痛感した。

今回の読み聞かせの様子からも、絵と文章が同時に子どもへ注がれることで、絵を見ながら想像豊かに、また文章により物語の筋への理解が確実になることは明らかだった。しかし、教育現場の多くの読み聞かせは、聞き手が多数になり、今回のような読み聞かせとは形態が異なる。本の持ち方や見せ方、本文の読み方(ほぼ覚えて読む)、聞き手が多数になることでの反応への対応等、留意点も増える。今後、教育現場での実践による考察を実施したい。

＜引用・参考文献＞

- 1) 河合隼雄、松居直、柳田邦男『絵本の力』(2001) 岩波書店 P51-53 「絵本・児童文学研究センター」主催第五回文化セミナー「絵本の可能性」(コーディネーター斎藤敦夫氏、2000年11月12日、小樽市民会館)の記録
- 2) 佐々木宏子『絵本と想像性』(1975) 高文堂出版社 P125
- 3) ルース・エインズワース作、石井桃子訳、堀内誠一画『こすずめのぼうけん』(1976) 福音館書店
- 4) 中村衞子『絵本はともだち』(1997) 福音館書店 P91-97
- 5) 時田史郎「新しい物語絵本の展開(2)」『こどものとも50周年記念ブログ2005/12/2号』 <https://fukuinkan.cocolog-nifty.com/kodomonotomo>

**Association of a picture and words  
in the story-telling of the picture book  
~Using the picture book “The Sparrow Who Flew Too Far”~**

Yukari UCHIDA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University  
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

Picture books consist of illustrations and text. When reading aloud, the act of listening to the words with the ears and looking at the illustrations of the picture book with the eyes is performed at the same time. How do children enjoy the world of stories when they look at pictures, when they hear only the text, and when they hear the text while looking at the pictures? Therefore, I reviewed the picture book from the child's point of view, and considered how the story reaches the child's heart in “reading”, focusing on the relationship between the picture and the word. The effect of picture books was maximized when they were read aloud. Furthermore, the storytelling that children can enjoy in the world of picture books was based on the selection of picture books according to the age and experience of the listener. As a reading skill, it was necessary to read in a way that matched the characteristics of the picture book (ratio of pictures and sentences, content).

Key words : storytelling, “The Sparrow Who Flew Too Far”, picture and words